

---

# さち子のタロット占い～プロローグ～

立花泉

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

さち子のタロット占い〜プロローグ〜

### 【Nコード】

N4616D

### 【作者名】

立花泉

### 【あらすじ】

定年退職を機に再び小説家を目指す夫だが、過去の負い目から幸子にもタロット占い師を勧める。勝手さに呆れ無視する幸子だったが、消えたはずの夢が燦りはじめて。30年以上経って夢を叶えた占い師の、それが始まりの日。

## 1・過去

「おまえの好きにしていどうぞ」

定年退職を迎えた日の晩、電気を消して今から寝るぞというときになって、夫、川端春夫が言った。

すでに布団の中に入りこんでいた妻、幸子は、唐突な言葉に意味が分からず思考を巡らせた。

導いた答えは離婚だった。

さすがに口には出せずありきたりな質問をした。

「何の事ですか」

春夫は即答しなかった。

布団が擦れる音がした。

「君と結婚して37年。私はこの歳月を家族のために費やしてきたつもりだ。建て売りだが庭付きを買った。そのローンも終わっている。子供達3人も大人になり、それぞれの道を歩んでいる。家の主としての責務は、一応成し遂げたと思っただろう。」

春夫は話すのをやめた。

「それで？」

幸子は促した。

何の反応も返ってこない。

話す気がないならと幸子は眠ることにした。

直後、春夫が話し始めた。

「同僚はまだまだ若いと言って再就職を望んでいる。だが・・・私は、・・・これからの人生は自分のために使いたい」

「好きにしていどうぞよ」

そんなことかと幸子は思った。

だが春夫はどうも違うらしい。何か小声で言っている。

聞き取れなくて聞きなおした。

「おまえも占いを始めたらどうだ」

予想もしない言葉が出てきて、混乱した。

「独身時代に大切にしていた本やカードが、まだ押入れの中にあるのは知っているぞ」

面食らうとはこういう事なのだろうか。

「今更ながらとは思うが、もう一度始めたらどうだ」

「見返りは何ですか」

気がつけば出た言葉だった。言葉が悪いと思ったが、春夫は気にならないようだ。

「うん。・・・もう一度、目指してみようかと思う。ただ・・・昔を思うと、そのう、後ろめたさを感じて」

幸子は呆気にとられた。

この人の妬み心の強さはご都合主義を生み出すものらしい。

「私のことは気にせずに。あなたの好きなようにしたら。私は文句を言うつもりはありませんよ」

「う・・・ん」

歯切りが悪い。

内心、溜息をついて幸子は続けた。

「免罪がないとできないの。あなたは十分に家族のために頑張ってくれた。それだけで充分よ」

「ありがとう。寝るよ」

春夫が安堵したのが分かった。

暫くして、春夫のいびきが聞こえてきた。

幸子は眠れなかった。

まさか、春夫がいまだに引きずっていたとは。

37年前、2人は結婚した。

出合った頃、幸子は卸業者の事務員として働いていた。春夫は大学生だった。

同じ年だが、幸子の目には知的だが親に甘えたお坊ちゃまに映った。

何の話から今では覚えていないが、お互い夢を持っていると知っ

たときから、距離が近づいたように記憶している。

春夫はそれがファッションとでもいうように、あまり本を読まない幸子でも知っている著名人の書を片手に持っている人だった。

最初はインテリで鼻につく印象だった。それが自分の夢に一途な人と鞍替えした。

働く苦勞をまだ知らなかったが、その目は現実を直視していた。

2人はいつしか付き合うようになった。

デートコースは図書館や映画館が定番だった。

大学在籍中に小説家になることを目標としていた春夫だったが、その努力が報われることはなかった。

予選通過はしても最後で落とされる。後一步の壁を越えることができなかった。

諦め切れなかった春夫は、卒業後、就職しなかった。

やがて、幸子が妊娠した。

話すことが怖かった。中絶はしたくなかった。できれば生みたい。

だが、春夫は喜ばない。

幸子はそう信じて疑えなかった。

意を決して事実を告げたとき、厚い雲が切れ光が差し込む風景が見えた気がした。

「結婚しよう。子供は生んでくれ」

迷うことなく春夫は答えたのだ。

直視した春夫の目を見たとき、一生この人についていこうと決めた。

春夫は家族を養うために就職をして営業マンになった。

予想以上の残業、付き合いの多さ。慣れない営業へのストレス。

仕事は春夫から時間を奪い、夢を遠ざけていった。

片や幸子は余暇を占いで潰していた。

だんだん春夫は幸子が妬ましくなっていた。

あのままだったら・・・という思いが蝕んでいったのだ。

ストレスと焦りの矛先は、すべて幸子に向かった。

幸子は春夫がどれほど小説家になりたかったか知っていた。家族のために、その夢を横に置いてくれたことに感謝していた。

春夫の態度が、愚痴が多くなり横暴な態度に変化していても、その胸中や立場を理解して耐えていた。

しかし、そんな生活が長く続くわけがなかった。

春夫への不満が生まれ、心を荒んだものにしていった。

ストレスが募り、その捌け口が長男義男に向かった。

夫の捌け口が自分。自分の捌け口が息子。

こうなると悪循環だ。

幸子は改善を求めて春夫に問うた。

春夫は語らない。

幸子は離婚を考えるようになった。

離婚を決意したのは、泣き止まない義男を思わず叩いた夜だった。

初めてだった。

なかなか泣き止まない義男に、春夫は幸子の躰がなっていないからだと罵倒した。

じっと立っていると寒さが身にしみる晩秋の夜、幸子は義男を抱いて歩いた。

閑散とした道を月が照らしていた。

幸子の影が薄く、長く伸びる。

義男はもう泣き止んでいたが、帰りたくなかった。

そのまま歩き続けた。

団地の隅にある公園に辿り着く。その頃には、義男はすやすやと眠っていた。

ベンチに座る。

義男の温もりが伝わる。

その寝顔をじっと見つめた。

幸子は義男のために立ち上がった。

家に戻ると、春夫はいびきをかきながら寝ていた。

その顔を見たとき、幸子は離婚を決意した。

離婚を告げたのは次の晩。

春夫は幸子が目を疑うほど狼狽し、部屋の中を右往左往した。

理由は冗談ではなく本当に分からないらしく、幸子の一方的な我がままだと自分を保持した。

幸子は呆れながら具体的に精神的苦痛を訴えた。

義男に及ぼす悪影響を懸念し示唆した。

春夫は力が抜けたように座り込んだ。

「あなたにとって今の生活のすべてがストレスになっていると思うの。義男のためにも別れたほうがいいと思う」

当時、私が働くから夢を追いかけてとは言えなかった。

思いもつかなかった。

春夫は暫し無言だった。やがて、ぼつりぼつり、小さな声で本音を語りはじめた。

「夢を捨てたわけじゃない。ただ今は家庭を守ることのほうが大事だから。その判断が間違이었다とは今も思わない。ただ・・・君を見ていると、どうしようもなく焦燥感に襲われて。何歳からでもチャレンジできる。今は・・・今、しなければならぬ事を優先しよう。そう自分に言い聞かせても・・・。私は・・・、小さく卑しい男なんだ」

春夫は頭を垂れていた。

「私は、おまえと別れるのは嫌だ。ちゃんと納得して選んだはずなのに」

自分の実力や才能に見切りがついていたならまだしも、違った。だが成功を約束されているわけではない。賭けに出るような性格ではなかった。保障されていない未来に、幸子と子供を巻き込めなかった。

春夫はその結論に納得したはずが、思わぬ負の副産物ができたというわけだ。

「私もできれば別れたくないわ。私も家庭が第一なの。分かったわ。もうしない」

幸子は本棚に行き、タロットに関する本を抜いていった。  
春夫は止めなかった。ただ一言、すまないと呟いただけだった。  
あの日から春夫は自責の念に囚われていたのかもしれない。  
そう思うと春夫が気の毒に思えた。

確かに独身の頃は占い師になることを考えていたが、子供ができて結婚してからは優先順位が変わった。

家庭の方が大事になり、占い師への志は萎えていった。本音を聞いたとき、悪いがそんな事かと思っただくらいだ。

三十年以上も経っているのに負い目を感じていた。

そんなに引きずるなら、あの時もっと話せば良かったと思う。

幸子のごめんねと呟いた。

春夫はうくと呻った。

## 2・現在

いつもの習性で6時に目が覚めた。

幸子は起き上がり、まだ寝ている春夫を見下ろした。

今日からいつも家にいる。そう思うと嬉しいやら面倒くさいやら。

春夫が起きてきたのは7時前だった。彼もいつもの時間だ。ちよ  
うど大根とワカメの味噌汁ができたところだった。

食卓に運ぶ。

春夫は新聞を片手に、席に着いた。

幸子が席につくと、春夫は新聞に目を通しながら聞いてきた。

「昨夜の事だけど、働かないことに呆れているか」

「別に。私たちは60歳から年金を貰えるのでしょ」

「ああ」

「どうにかなるわよ」

春夫は新聞をとじた。

「今日はハローワークに行ってくる。その後は役所だな」

幸子はきゆうりのたくわんをポリポリと食べた。

失業保険に国民健康保険に。退職後に必要な手続きを済ませた翌  
日から、春夫の生活が一変した。

午前中は読書。昼から図書館へ出掛け夕方に帰宅。夜は執筆活動。  
それは大学を卒業した後の、春夫の生活パターンだった。

幸子は内心、安心した。

毎日家に居られるよりはいい事だったからだ。

今更24時間一緒というのは、さすがに疲れそうだ。

自分の父親が実は小説家志望だったと初めて聞かされた長女、和  
代と次女、美咲は、驚きの声を上げてはしゃいだ。

義男はすでに知っていた。中学生の時に進路の事で相談した際に  
知ったという。

だが小説家を再度目指す事には、妹2人同様、驚きを隠さなかつ

た。

本好きなのは知っていたが、まさかそこまでとは思わなかったらしい。

さらに映画に誘われたと話すと、人格が変わったのかと言った。

これにはさすがの幸子も啞然となったが、子供達が抱く父親像を思い起こすと苦笑いへと変わった。

仕事一本のまじめ人間。趣味といえば読書。

そんな姿しか見せていないのだから。

付き合っていた頃の様子を幸子は話した。

何だか、お母さんが楽しそう。

そう茶化したのは美咲だった。

一番興味を示したのは彼女だった。和代もそれなりに興味を示したが、自分の家庭の方が大きいらしい。小学生になったばかりの息子がいるが、もう中学受験に向けてあれこれ調べている。

義男にいたっては、話を一通り聞くと流すようになった。

奥さんにたいして同じ態度を取っていたら嫌われるわよと茶化してやったが、あっさりと聞き流された。

冷たいと幸子は感じたが、和代に言わせると合理主義だという。

自然と美咲と連絡を取り合う回数が増えた。

三人とも同市内に住んでいたが、それぞれが忙しいらしく、子供達から言い寄ってくる回数が減った。

特に娘達は息子より酷かったから、素直に嬉しかった。

「それで、お母さんは何もしないの」

美咲から言われたのは、日曜日の昼下がり。

彼女は独身だが、一人暮らしがしたいと2年前に家を出た。

最初の1年くらいはまめに連絡をよこし帰ってきていたが、一人暮らしの味に酔ってからは激減した。

2ヶ月ぶりの帰省だった。

「何の話？」

「占いよ」。昔、タロット占いをしていたのよね」

お茶を嘔きこぼしそうになった。

「お父さんから聞いたよ。高校生の時かな……。あんちゃんも姉さんも知ってる」

土産の焼き菓子を頬張りながら言った。

「呆れた……。子供達に話すなんて」

「私たちの事で喧嘩していたじゃない？ お母さんがいつも勝ってた」

そうかしらと幸子は思った。

「お母さんの必殺文句が、お父さんをいつも黙らせていたのよね」  
幸子は心外に思った。子供達の事は納得した上で決めていたはずだ。

「何？ 殺し文句って」

「本当にしたいと思って、それができなかった時の後悔は大きい、だったかな」

それを言われると、ぐうの音もでなかったという。

「それでお父さんがボソつと言ったの。お父さんの身勝手が原因で、やりたい事を断念したんだって」

そこから幸子がタロット占いをしていた事やプロを目指していた事を知ったというのだ。

言われてみれば、喧嘩のたびに言っていたような気がする。

でも、自分のことではない。そこまでの執着はなかった。

「あれはお父さんのことよ。まあ、独身の頃は考えていたわね。あなた達が生まれてからはどうでも良くなったけれど。お父さんの事はきっかけにしかすぎないのよ」

美咲はふうふうと呻った。

「でも、今でもとってあるのよね」

「押入れにね。捨てませず出しませず、ずっと置きっぱなしよ」

三十年以上経つのかと思った。

何となくとっておいて、いつしか忘れた。いいかげん捨てないと。  
「また、始めたら」

幸子は噴出しそうになった。

「今頃？ もう覚えていないわよ。忘れた」「そう？」

「晩御飯はどうするの？ 食べていくよね」

「知らない。友達と食べる」

幸子はがっかりした。

「友達・・・って、男？」

期待をこめて言う。

美咲はさらりと答えた。

「違うよ。女」

「・・・いい人とかいないの」

「いない」

あっけなく返事が返ってくる。幸子は溜息をつきたくなった。

「いいじゃない。別にいい」

胸中を読み取った美咲が先手を打ってきた。

幸子は溜息を飲み込んだ。

夕方、美咲は帰っていった。

その暫く後、春夫が帰ってきた。

バス停で美咲と会ったという。

幸子はジャガイモを洗っていた。

肉じゃが、ほうれん草のおひたし、わかめのお吸い物、大根の漬物。

今夜の夕食メニューだ。

それを春夫は10分足らずで食べて、自室に籠った。

一人残された幸子は、黙々と食べた。

初めは呆れたが、今では慣れた。ただ、妙に寂しくなる瞬時だけは、消えなかった。

夕食の片付けを終え、お風呂に入った。

その後にもいつも見ているクイズ番組は、野球中継のためにお休み。裏番組はパツとせず、幸子は瞬く間に退屈になった。こんな時、春夫でもいいから隣にいれば話し相手になるのだが。就寝時間まで部屋から出てこないだろう。幸子はおもむろに立ち上がると、寝室に向かった。タロットのことを思い出したのだ。記憶違いでなければ寝室の押入れ、下段の奥に置いてあるはず。手前には大小の箱が積み並べられていた。それらを静かに運び出す。

大半の物を動かしたとき、それらしき箱が見えた。身をのりだして取り出した箱の表面には埃が溜まっていた。ティッシュで拭き取る。

あの日以来、一度もあけたことはない。

封印の証であるような茶色のガムテープが一周している。

幸子は一気にはがし、開けた。

タイムカプセルを発見したような気持ちだった。

懐かしさと恥ずかしさが押し寄せる。

三冊のタロット本と一箱のカード。

本を手に取り、ぱらぱらと捲る。

覚えのある文字の羅列が飛び込んできた。

幸子の胸の奥で、何かが動いた。

本は脂が染み込み込みベタつきがあった。

気持ちが悪かったが、予想よりは保存状態が良かった。

カードを手取る。

こんなにも傷んでいたのかと驚いた。

大半のカードの角先が曲がり、捲れていた。

幸子一枚、一枚、見ていった。

覚えていない。美咲にそう言ったが。

違った。

カードから発想されるイメージが、次から次へと浮かんできたの

だ。

それらは暗記物ではなく幸子に染み込んだものだった。だが幸子にはカード自らが語りかけているように感じた。

歡喜の震えが走る。

気が付けば夢中になっていた。

七十二枚。すべてのカードを見終えた頃、満足感と充実感に包まれていた。

そこに小さな自信の種を残して。

内の世界から外の世界へ意識が移行したとき、影に気づいた。

春夫だった。

感じていたのが一瞬で吹き飛んだ。代わりに満たしたものは、怒りを含んだ恥心。

「声をかけてくればいいのに」

「悪いかなと思って」

黙って見ているほうがかなりの悪趣味だと、幸子は言いたくなかった。

「懐かしいな」

本を手取る。

幸子は眉をひそめた。

懐かしいという言葉が出てくるほど、彼について占った覚えはない。

「君の占いって、結構当たっていたよな。みんな、すごいって褒めていた。やっぱり素質があるのだろう」

「知人ばかりだったもの。相手の性格や事情を知っていたから読みやすかっただけよ。まったく知らない人だったらどうだったか」

そんなことないよ、なんて返事が返ってこようものなら殴ってやる。

構える幸子に春夫は予想外の言葉をかけた。

「でも、君の占いにたいする持論は本物だと思うよ。占いは道標」  
幸子はぼかんとした。

さち子のタロット占い～プロローグ～

「いや……。見ていたら、昔をね、思い出したんだ」  
春夫の頬が、赤らんだ。

### 3・未来

あの日以来、押入れの中に置いてあったタロットカードと本は、たんすの上が新たな住処となった。

春夫が置いたのだ。

幸子は黙っていた。

その時点で捨てる気がない証なのだが、幸子は認めなかった。

本当は分かっているのだが、春夫の、僕が言ったとおりでしょうと言わんばかりの、

緩んだ口元を見てしまったのだ。

春夫は相変わらず趣味の中で過ごしていた。

変わったことといったら、家事をしてみたいと言い出したこと。

結婚してから初めて言われた。

小説を書くためだろうと思ったから、好きにさせることにした。

主婦歴37年のベテランの目から見た新米は、手や口を出したくなる有様だった。

どうせ長続きはしないと、片目をつむった。

ところが一週間経ち、10日経ち、一向に止める気配がなかった。食器の洗い方すら冷や冷やさせていたのが、すっかり慣れた。

くやしいことに幸子より丁寧に洗う。

包丁の扱いはまだ不器用だったが、上達しているのが見て取れた。これは・・・と、幸子は驚いた。

春夫自身もはまるとは思わなかった。

いくら好きな事とはいえ、毎日が読書と執筆活動だけではマンネリ化する。メンバーに相談したら家事をするといいと言われた。最初は男が家事かと思っただが、なるほど、いい気分転換になる。

後片付けくらいなら安心して任せられるようになると、春夫の役目となった。

初めは楽になったと喜んでいた幸子だったが、時間を持て余す状

態になると話は別になってきた。

他人に話したら贅沢だと言われそうだが、することがないというのは案外きついものだった。

春夫は好きなことをすればいいという。

好きなことといわれても、幸子にはこれといった趣味がなかった。若い頃はファッションに映画に、様々な事が好きだったような気がする。何をしていても楽しかった。

その中でも一番夢中になったのはタロット占いだった。

子供の頃から占いが好きだった。星占い、手相占い、姓名判断、血液型占いなど。

数ある占いの中でタロット占いに行き着いたのは、奥ゆかしい神秘さを感じたからだった。

カードの絵は単なるイラストではない。あれはアイコン、聖図像だ。色でさえ意味を持ち、カードは秘められし物語をつぐむ。

身体が熱くなりそうだった。血が騒ぐというべきか。自分がやりたいこと……。あるじゃないか、そういつているようだった。

ある晩のこと。

そろそろ寝ようかと布団を敷いていると春夫が入ってきた。いつもより一時間程早い。

眠たくなつたのかと思いきや、来てほしいという。

幸子は途中でやめて、春夫の自室についていった。

机の上に置かれてあるパソコンは、電源が入ったままだ。

「何ですか、これ」

モニターを見て、目が丸くなった。

複数人からのメールだと一目で分かったが、その差出人の名前が、紅麻呂、ひよつとこ、闇太郎、さぶろう、とある。

「ペンネームですか」

「ん。ハンドルネームだよ」

「何ですか、これ」

「ネットサークルだよ。創作系のね、入ってる」

「・・・小説を書いていたのでは？」

「書いてるよ。サークルに入ったのは、そのほうが切磋琢磨できるからだよ」

そう言われたものの、幸子はなんだか拍子抜けした。

逆に春夫は誇らしげだ。

彼が楽しく見える要因は、案外こちらにあるのかもしれない。

「私に見せたいものって？」

「うん。これだ」

春夫はマウスを動かし、一通のメールをクリックした。

題名は相談。差出人はさぶろうとあった。長いメールだった。

要点を春夫がまとめる。

「この人が飼っている犬が、1月程前に居なくなったのだ。近所を探したり、ビラ貼りをしたり、保険所や病院にも問い合わせたけれど、見つからないんだ」

「それはお気の毒で」

「犬には首輪を着けていて、連絡先の番号と名前を書いてある。普通、そこまでして駄目だったら諦めるところだろうけど、お孫さんが許してくれないそうだ」

「他の犬じゃ駄目なの」

「駄目なんだと。マロンという名の雑種の子犬なんだが、お孫さんが拾ってきて、世話をしていたらしい」

「何故、いなくなったの」

「庭に放して遊ばせた時、垣根の隙間からいなくなったようだ。人の目には盲点だよ」

幸子は相槌を打った。春夫が言いたいことが見えてきた。

「いくつなのかしら」

「小学4年生だったかな」

「女の子?」

「男の子」

幸子はいまどきの小学生を思い浮かべた。しかし思い浮かぶのは小学1年生になった孫の姿。

「君に頼みたいことなんだけど」

「今、考えています」

「・・・何を?」

幸子は一瞥した。

「何って、そのお孫さんを説得する方法でしょう」

「・・・いや。説得はいいよ」

「はい?」

「頼みたいのは、マロンのことを占ってほしいんだ」

「はい?」

幸子は耳を疑った。

「だめかな?」

「・・・どうして、そうなるんですか?」

「だって、できることはしたし、お孫さんは許してくれないし、八方塞状態みたいだから。何かこう突破口みたいなものができればと思っただけ」

「だから、どうして占いなのですか。箸にも棒にもならないかもですよ。第一、この人が望んでいるのですか」

「いやー。占ってほしいなんて一言も言われていないけれど」

幸子は頭痛がしそうになった。

「だったら、余計なことをして、笑われますよ」

「大丈夫だよ」

春夫は断言した。

幸子は苛立ちを感じた。

「ほら。ここを読んでごらん」

春夫はマウスを動かして一文を指した。

「ほら、藁にもすがりたいって書いてある」

「冗談なのでは？」

「さぶろうさんは冗談を言うタイプじゃないよ」

幸子は眉間に皺を寄せた。

「文は人成り。いいかな？」

幸子は返事をしなかった。春夫はそれを承諾の意とくみとり、さぶろう宛てに返信メールを送った。

春夫がメールを打っている間も、送信ボタンを押す前後も、止めることはしなかった。

暫くして、さぶろうからメールが届いた。

画面には一言だけだった。

よろしく願います。

文面を読んだ幸子は、がっかりした。もっと書いてほしかった。しょうがないな。やるか。

そう思えるほど後押しをされたほうがやりやすかった。

「じゃ、お願いね」

とても楽しそうな目が、幸子を見つめていた。

#### 4・結果(1)

やるからには真剣にやらないと、相手にもカードにも失礼だ。しかし、集中力がなかなか高まらない。緊張感なら先ほどからあるというのに。

ああ、水晶があれば・・・と幸子は思った。

集中力を高める方法として水晶を見つめていた。気持ち落ち着けたい時は香料だ。

幸子はゆっくりと深呼吸をすることで整えた。

まずカードを正位置に戻す作業から始めた。その際、1枚1枚のカードに、何について占うか、目的を語りかけた。これは幸子の儀式だ。この行為をする事によって、自分とカードが繋がる気がした。その後、カードを裏返し、シャッフル。

上下ばらばら十分に混じりあったと感じたら、カット。その間もカードに目的を伝う。

占い師によっては、上から何番目のカードを置いたら、次はそのカードから何番目・・・と間隔をあけて置くが、幸子は最初のカードから続けて置いた。

3枚のカードが、幸子の前に並ぶ。

スリー・カード・リーディング。

単純に、過去・現代・未来を見ていくもの。

カードを表に反す。ドキドキする瞬間だ。

ああと幸子は口元に手を当てた。

「いい？ 私の言うとおり、ちゃんと書いてね」

少し、強く言った。緊張しているせいだ。

春夫はゆったりとした姿勢で余裕をかもし出していた。大丈夫なのかしらと真剣に思った。

「いいよ。ただし、ゆつくりと。・・・できれば、書き言葉でお願いします」

「えっと、結論からいうと、マロンちゃんは無事で、戻ってきます」「おい、それ、本当かい?」

「打つ手をやめて幸子を見た。」

「本当ですよ。ちゃんと説明するから、ちゃんと書いて」

「ああ、ごめん」

「単純に過去・現在・未来の流れを見るスプレッドでしてみたの。単純な分、リーディング、解説を誤らなければ的中率は高いとされているわ・・・って、あなた、書かないで」

「ええっ? だって、言うとおりにして」

「書く必要ないでしょう?」

「そ・・・」

春夫は文句を飲み込んで、削除した。

「書いていいのだけ話してくれ」

「そのつもりです」

「・・・」

「過去をあらわすカードにソード3が出てきたの。これは別離、別れを意味するけれど、三角関係の意味もあるの。このカードで互いの気持ちが表れているけど、第三者の存在も知らしめている」

「ということは、いくら探しても見つからないのは、誰かが隠しているってわけか」

幸子は頷いた。

「現在を表すカードは、ワンド3。これは穏やかな満ち足りた生活さぶろうさんの事じゃないのは明白だから、マロンちゃんのことね。マロンちゃんを連れて行った人は、犬好きで優しい人よ」

「犬好きなら、飼い主の気持ちが分かるんじゃないかな? それとも、欲求が勝っているわけか」

「相手の気持ちはどうかしら? ただ未来に正義のカードがでてくるから、さぶろうさんの正当性は認められているわ」

「というと?」

「正義は、その名のとおりに正義をあらわすわ。あと公平とかバランスとか秩序とか。なかなか厳しいカードよ。相手の人から連絡があるか、一緒にいるところを見つけてしまうか。とにかくマロンちゃんの真の飼い主はさぶろうさんだと認めているから、戻ってくるってこと」

「ふくん、じゃ、いつ頃?」

「ん、分からないわ」

「分からないって」

春夫は幸子を見た。

申し訳なさそうな目とぶつかる。

「そういうのって苦手なのよ」

「確か、言っていたね。陸上選手にたとえると短距離選手だって」

「ん、せいぜい長くて三ヶ月つてところかしら。本によっては、期

日の出し方があることはあるけれど、私はあまりね」

「じゃ、無理か?」

「4と6が、関連数字なの。4日か6日目。4週間か6週間……」

もしくは4か6かの数字がつく日……あいまいね」

「じゃ省くか。さぶろうさんには、そう遠くない未来、長くて数ヶ月と書いておこう」

幸子も同意だった。

あいまいな事をいって、期待感をあおるのは気が引けた。

「さぶろうさん、どう思うかしら」

「当たったら、喜ぶだろうね」

当たるといいのになと幸子は思った。

自分の占いの結果がどうなったのか、毎日が気になった。

いつしか「さぶろうさんから連絡きた?」が幸子の口癖となった。

長くて三ヶ月と自分で言っておきながら気が短いものと、春夫は

笑った。

さぶろうから愛犬のことで連絡があったのは、一ヶ月を過ぎたときだった。

「すごいぞ、幸子」

興奮した声で寝室に入ってきた。

「当たったよ」

その一言で幸子は察知した。目の前が明るくなった。

「本当に？ それは良かったですね」

声が弾む。

春夫は興奮がやまないようだった。

「幸子の占いどおりだったよ。第三者がいたよ。その人から連絡があったんだ。もっと早く連絡しなくてすみませんって言われたらしい」

「そう。さぶろうさん、ほっと安心ね」

「ああ、君にお礼をって言われたよ」

幸子は微笑んだ。

素直に嬉しかった。自分の占いが的中したこと、さぶろうが喜んでくれたこと。

ああ、やっぱりタロット占いは素敵。

幸子は心の底から思った。

## 5・結果(2)

ほんのささいな事が自信になるのは自惚れだろうか。

さぶるうの件が終わって数日。

幸子の心中は、ある思いで一杯だった。

もう一度、占い師を目指したい。

やはり自分は好きなのだ。

春夫が定年退職した晩、言われた言葉が幸子に芽生えた。

・・・これからの人生は自分のために使いたい・・・。

春夫が家族のために尽くしたというのなら、幸子も尽くしてきたのだ。

先はどうなるか分からないが、今は、春夫と気ままな二人暮らしだ。春夫さえよければ、もう足かせはない。

ああ、でもどうしようと幸子は迷った。

話すのが癪だった。

ほら、僕の狙いどうりでしょ？ と言っている春夫の目が浮かぶ。

しかし、春夫の協力と理解がないと成立しないのも事実だ。

幸子は決意した。

自分はもう60歳。

人生の半分はとうに過ぎた。

この年になつてと、笑われてもいい。

ああ、そうかと幸子は気づいた。

あの晩の春夫も同じ気持ちだったのだろう。

もしかしたら、かなり前から決めていたのかもしれない。その日まではと、黙々と働いていたのだろう。

いつもなら先に寝てしまう幸子だったが、春夫が来るまで待つていた。

「あなた、お話があるの」

春夫が布団の中に入った時、幸子は切り出した。

「起きてたの？」

春夫は驚いた。

「話って、何かな？」

幸子は即答できなかった。

「話って、何かな？」

春夫は緊張した声音で聞いた。

「その・・・、私もやりたい事をしていいかしら？」

「いいよ。もちろんだ」

声音が優しい。そんなことかと安心したようだった。

「タロット占いかい？」

「まあね・・・」

「いいんじゃないか」

嫌味も感じられない。幸子は急に小恥ずかしくなった。

「私・・・できるかしら？」

「大丈夫だよ。幸子さんは昔から意思が強いし、実行力がすごい」

幸子は妙に嬉しくなった。

「どうするか、プランは考えているの？」

幸子のはやる心を抑えた。

「インターネットを通じてが一番かなって思うけれど・・・。あ

なたに、パソコンの使い方を教えてほしいの」

「いいよ」

春夫は欠伸をしながら言った。

幸子は興奮して、早口に話した。

「修行したいから、お代はいらないわ。代わりに、占いが当たった

か知りたいから、連絡してくれないか頼みたいの」

「分かった、分かった。とりあえず寝ようよ」

「子供達には、まだ内緒にしててね」

「どうして？」

「だって、夫婦そろって、いい年してって、言われそうですもの」

春夫は笑いながら言った。

「言わないよ。でも内緒にしておきたいなら、そうしよう」  
幸子はワクワクした。

こんな浮き足だった気持ちは久しい。

「でもね、本当はお客様の顔を見ながらやりたいのよ。でも、無理よね。即答できるほどの腕があるとは思えないし、家の事はなおざりにはできないし」

「……」

もう春夫は聞いていなかった。  
いびきが高らかに響いた。

さち子のタロット占い～プロローグ～

6・結果(3)(前書き)

## 6・結果(3)

それからの幸子の生活は、慌しくも充実したものになっていった。なると決めてから1カ月の間。入力の実習に、タロット占いの勉強。

大手サイトから無料IDを習得したり、掲示板に記事を載せた。さち子のタロット占い。

ハンドルネームにもさち子といれた。

本名を使うことに春夫はいい顔をしなかった。だが幸子は聞き入れなかった。

これは自分の占いなのだ。子供達には内緒にしていた。

なんだか恥ずかしかつたからだ。春夫はそのほうが面白いかもと協力した。

幸子はドキドキした。

暇さえあれば書齋に赴き、パソコンを立ち上げ、依頼がないか確認した。

ところが中々依頼は来なかった。

見れば、幸子と同様な内容で多数の掲示板がある。しかも中には一流と思しき人物が混じっていた。

占い初心者。鍛錬の為できれば占いの結果を報告してほしいと書いたのがいけなかったのか。

幸子の希望は早くも落胆に変わった。それでも、一日一回はチェックするようにした。

初めて依頼がきたのは、開設してから三週間を過ぎてからだ。

これを機に、少しずつ依頼が増えていった。

肝心の占いの結果報告は、まだ来なかった。

幸子はまた落胆しそうになった。

そんな自分を励ます。

今からだ、と。

楽しみながらいけばいい。

一通のメールが初めて届いたのは、もう結果報告はいいやと思いはじめた矢先だった。

この頃、幸子の占いが口コミで評判になってきているのを、無論、知るはずもなかった。

6・結果(3)(後書き)

やっと完結しました。最後まで読んでいただいた方には頭が下がります。

どうしてこの話を書こうと思ったのやら。

山もなければ谷もない。道でいうなら、淡々と同じ景色が続く高速道路のようなもの。

そんな話を書きたくなって書いてみました。

ある種、試験的なものです。その結果は……うん、どうなんでしょう(汗)。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4616d/>

---

さち子のタロット占い~プロローグ~

2009年3月24日10時28分発行